

## 第3回（平成21年度）栃木県元気な農業コンクール首都圏農業部門 受賞者の経営概要

◎ とちぎ元気大賞（農林水産大臣賞・栃木県知事賞）

■ 榎毛 隆行・良子 氏（真岡市・園芸）



### 1 受賞のポイント

本人、弟、両親夫婦の3世帯で、雇用を活用したトマト養液栽培の大規模・企業的経営を実践。

系統出荷を基本に、業務・加工用取引や直売など、複数の販売チャンネルにも積極的に取り組む。

また、はが野農協トマト部会青年部でプロジェクトチームを立ち上げ、新たな栽培法に挑戦し経営改善に一定の成果を上げるなど、時代の流れをいち早く捉え、常に経営改善・技術革新にチャレンジする若きリーダーとしての活躍が高く評価された。

### 2 経営の特色

#### (1) 経営の発展経過と現況

大学卒業後、約10年間の養液栽培プラントメーカー勤務を経て、平成10年に就農。県内で初めてトマトロックウール栽培を開始した父の経営をベースに、本人及び弟の就農を機に規模拡大を進め、県下トップクラスの1.8haの施設面積を誇る。

#### (2) 生産技術について

前職で得た植物生理、農業用資材等に関する豊富な知識と人脈を活かし、炭酸ガス施用や溶存酸素などハウス内環境制御に着目した先進技術導入を行ってきた。

土耕栽培の技術革新が進み、養液栽培のメリットが薄れてきたことなどから、上記の青年部プロジェクトとして平成18年から1年2作の6段中密植栽培に取り組み、食味及び上位等級発生率の向上とともに、病虫害発生軽減、暖房・雇用費等のコスト削減などに着実な成果を上げて



6段中密植栽培のほ場

いる。低段密植栽培の導入等にも意欲的で、更なる技術の革新を目指す。

また、安全・安心の確保や環境への負荷に十分配慮して、県版GAP（農業生産工程管理）、IPM（総合的病虫害・雑草管理）などを積極的に取り入れている。

#### (3) 労働と生活について

法人化を視野に入れ労働環境整備に努めるとともに、1日の労働時間（家族も雇用も8時から17時）を決め、週休日を設けるなど、ゆとりのある生活を実現している。

#### (4) 販売の工夫について

全量系統扱いを基本としながら、中玉トマトの契約栽培や、地域の仲間とのリレー方式による業務・加工用向け周年出荷などに取り組み、高単価での販売を実現している。

また、規格外品の直売や、レストラン等へハーブとのセット販売を行うなどの高付加価値販売にも取り組んでいる。

## ■ 村井文市・光江 氏 （大田原市・園芸）

### 1 受賞のポイント

大田原市を中心に栽培されている地域ブランド「那須の白美人ねぎ」の露地ねぎを、湯津上地区に初めて導入したパイオニアである。作業の機械化と雇用の活用による大規模周年栽培を極めて短期間に確立し、合理的かつ効率的な優れた経営を実践している。米作地帯における土地利用型園芸経営のモデルとして、また、パートナーシップ経営の実践においても普及性が高い。



### 2 経営の特色

#### (1) 経営の発展経過と現況

水稻4haの第二種兼業農家であったが、平成13年に光江さんがねぎ栽培にチャレンジしたことを契機に、その2年後文市さんも就農、夫婦二人で本格的に栽培に取り組む。

栽培講習会やベテラン栽培者などに夫婦で足繁く通い、熱心に生産技術の向上に努め、6年間で、3.8ha(県内一)まで作付拡大を図った。昨年、後継者として長男のパートナーが就農。長男も5年以内に就農予定で、更なる規模拡大を目指す。

#### (2) 生産技術について

湿田で当地区では向かないとされていたねぎ栽培であったが、サブソイラーによる耕盤破碎、明渠・暗渠による排水対策、深耕により収量・品質向上を図った。大規模経営ながら作業機械を利用した適期管理等により、平均単収は3.5t/10a(部会平均2.6t/10a)と高い。

また、技術的にも難しい夏ねぎ栽培に取り組み、小トンネルや平マルチ栽培、効果的な病害虫防除などの技術により、周年出荷を実現している。

GAPの実践のほか、毎日のは場観察や地域全体の共同防除による効果的防除、は場毎の土壌分析の実施による適正施肥などにより、農薬・化学肥料の低減に努めている。

また、ねぎ残渣を水稻は場へ還元し、循環型農業に取り組む。

#### (3) 販売の工夫について

「なすの白美人ねぎ」ブランドとして、厳正な出荷規格を守り、効率作業による即日出荷で、鮮度保持を心がけている。今年度から加工・業務用向け生産を開始し、コンテナ利用のバラ出荷に取り組む。また、光江さんは、ねぎ部会の女性で組織されている「白美人会」の一員として、量販店等での販売促進キャンペーンに参加し、直に消費者の声を生産に生かしている。

#### (4) パートナーシップ経営について

文市さんは主にはは場管理・収穫、光江さんは出荷調整及び経理・労務管理と役割分担を図っている。

また、家族がよく話し合って経営計画等を決定し、家族経営協定を有効に活用したゆとりある生活を実現している。村井氏の経営に習いパートナーシップで農業経営を考える生産者が増えている。



## ■ 山口守・和子 氏 （宇都宮市・畜産）

### 1 受賞のポイント

近年の飼料高騰下においても、ワンランク上の牛づくりにより安定した所得を確保しており、高い飼育技術が評価された。

また、JAうつのみや和牛部会長就任時に、それまで低迷していた銘柄牛「宇都宮牛」の復興プロジェクトを提案し、オリジナル飼料の開発、飼養管理マニュアルに沿った牛づくりにより、地域の枝肉重量・肉質を飛躍的に向上させ、組織の活性化やブランド力向上に大きく貢献した。



### 2 経営の特色

#### (1) 経営の発展経過と現況

乳雄子牛育成などを経て、昭和49年に黒毛和種肥育を開始した。

平成18年に自宅から車で30分ほどの真岡市に農場を移転し、現在は、肥育牛約100頭、和牛繁殖用雌牛3頭、育成牛約50頭を飼養している。

#### (2) 生産技術について

子牛導入後は豊富な乾草と大豆粕の入った配合飼料により第一胃や内臓・骨格の発達、強化を促している。その後、部会オリジナル配合飼料「特撰宮牛」の給与や飼養管理マニュアルに基づく飼料給与体系を実践し、飼料中のビタミンA量を考慮した給与や、飼養密度を考慮したストレス軽減等により、高品質枝肉の生産に結びつけている。

生後30ヶ月齢と県平均を下回る出荷月齢で、平均枝肉重量(545kg)、肉質格付 AB4,5 率が75%と高い出荷成績を誇る。

山口氏が携わったオリジナル飼料の開発及び部会員共通

のバイブル「宇都宮牛飼養管理マニュアル」作成とその実践により、部会全体の枝肉重量・肉質格付けが向上し、意欲ある若手担い手の規模拡大が進んでいる。なお、一組織が統一的な飼料給与を行っている事例は全国的にも稀である。

また、川名子稲わら生産組合との耕畜連携で13haの稲わら収集を行い、国産稲わら自給率100%を達成している。繁殖用雌牛からの体内受精卵を酪農家の乳牛に移植し、生産された子牛を買い取ることによる肥育素牛費の低減や、農場敷地内の林地を利用した妊娠牛の経営内放牧による省力化・健康増進など、随所にコスト削減の工夫が見られる。

#### (3) 販売の工夫について

全頭JA経由の共同販売を行う。農林祭や各種イベントで「珠玉の味 宇都宮牛」としてPRを行うほか、関係機関一体となり「宇都宮牛のブランド強化・地産地消推進方策」を策定し、地元宇都宮市内の小売店・スーパー、レストラン等で提供される仕組みづくりを行った。

また、宇都宮牛協会の事業として宇都宮市内の学校給食に供給し、地産地消と食育を推進している。



## ◎ とちぎ元気賞（栃木県知事賞）

### ■ 黒崎 佳克 氏（芳賀町・土地利用型）

#### 1 受賞のポイント

地域農業を支える担い手として稲・麦・大豆の大規模栽培に取り組み、高い栽培技術と作業の効率化・低コスト化の追求により、生産性の高い農業とゆとりある生活を実現しており、総合的に優れた経営として高く評価された。

県内でいち早く特別栽培米に取り組んだほか、農地・水・環境保全向上対策における地域の環境整備や畦畔カバープランツの導入など、環境保全型農業の実践に努めている。



#### 2 経営の特色

##### (1) 経営の発展経過と現況

自動車販売会社で整備士として5年間勤務した後、地域の中核的農家であった父に米麦等の栽培委託の依頼が多く寄せられるようになってきたことから、平成9年に就農した。両親と共に規模拡大を進め、現在は水稲約20ha、麦14ha、大豆11ha、作業受託13haの経営を行う。

##### (2) 生産技術について

「良い物、売れるものを作る」ことを経営の基本に置き、適期播種等の基本技術の励行と輪作体系の確立により、水稲・麦・大豆とも安定して高単収を維持している。また、大型機械を活用した作業の省力化に努め、労働生産性の高い経営を行っている。

さらに、麦・大豆では排水対策の徹底及び稲わらの早期すき込みによる腐熟促進を図り、麦は麦種を組み合わせることにより、収穫時期を分散させ適期収穫を図っている。

なお、農業機械のメンテナンスは整備士の経験を活かし自らが行き、修理コストの低減とともに故障の回避、さらにはオペレーターの安全確保につなげている。機械操作の技術レベルも高く、今年度の県農業機械利用技術コンクールでは最優秀賞を受賞している。

##### (3) 労働と生活について

徹底した作業の効率化と計画的な作業により、家族の時間を生み出し、生活にゆとりを持たせている。家族経営協定に基づき定期的な休日の取得に努め、余暇は少年野球の審判や地域の人とインディアカなどを楽しんでいる。

##### (4) 販売の工夫について

コシヒカリは全て特別栽培米であり、また、業務用需要がある「あさひの夢」の生産にも取り組み、収穫期の作業分散も図っている。麦は適正なタンパク含量を維持できるようにほ場毎に施肥設計を変えている。

##### (5) 地域農業への貢献

農地・水・環境保全向上対策の水田の生き物調査やコスモス栽培を通して、地域の環境整備に参加している。また、畦畔にセンチピードグラスや野芝を導入することにより、畦畔管理の省力化や除草剤の低減に努めている。

## ■ 実取近代化営農集団（大田原市・土地利用型）

### 1 受賞のポイント

米・麦生産に係る農業機械・施設の共同購入・利用及び共同作業による経営の合理化と、員外利用の農作業受託面積の拡大により収益性を高めた。集団運営においても公平・平等な利益配分に努め、再生産性・継続性の高い営農集団としての経営を確立した。

将来的に法人化及び集落営農組織化を視野に入れており、地域の農地集積の担い手として、また、本県土地利用型農業の効率化と持続的発展のモデルとして高く評価された。



### 2 経営の特色

#### (1) 経営の発展経過と現況

集団員の農業機械・施設の過剰投資を避け、農作業の合理化により農業経営の安定化を図ることを目的に平成2年3月に設立。丁寧な作業と高い技術力で地域の信頼を得て、平成20年は9戸で水稻約35ha、二条大麦20haの生産と、延べ面積で約60haの作業受託を行っている。

また、集団員個々の経営においても土地利用型部門の委託により余裕が生まれ、ハウスねぎ、アスパラガス、いちごなどの園芸品目の導入や畜産の規模拡大などにつながっている。

#### (2) 生産技術について

9名の豊富な労働力を生かし、さらに集団・個人所有の機械を効率的に組み合わせることにより、播種・収穫などの適期作業に努め、規模拡大と品質の維持・向上を両立させている。また、圃場の団地化や輪作体系の確立、土づくり、排水対策など基本技術を忠実にこなし、生産の高位平準化を図っている。なお、プール育苗、全量基肥肥料の側条施肥田植え、田植え同時箱施用処理、バラ出荷等の徹底した省力化が図られている。こうしたことにより、JAや農業振興事務所から新品種や新技術の導入時の試作や実証展示ほ設置の依頼を受けるなど、技術力の高さが認められている。

農業機械・施設については、日々の点検・修理を徹底し、使用年数を延長することにより減価償却費の低減を図るとともに、計画的な更新に努めながら、補助事業や制度資金を活用して共同作業に必要な機械を導入し、資本装備の充実を図っている。

#### (3) 集団の運営について

集団は男性7名と女性2名で構成され、男性は田植機、コンバイン、調製作業等のオペレーターや運搬作業、女性が作業補助や事務を中心に担当している。また、婦人部活動の一環として野菜の直売所を開設し、地区住民とのコミュニケーションの場として機能するなど、女性の地域での活躍が確保されている。

#### (4) 販売の工夫について

実需者及び消費者ニーズに対応し、水稻品種はコシヒカリに偏重することなく、なすひかりやあさひの夢を取り入れ、麦はスカイゴールデン、サチホゴールデンといった新品種の導入に積極的に取り組んでいる。

水稻の温湯消毒種子を利用し、本田での病虫害防除は箱施用剤と無人ヘリ防除のみとし、使用農薬の低減に努めている。また、麦GAPについては、生産者としてばかりでなく、乾燥調製施設としても取り組み、高品質麦の生産につなげている。

## ■ 市田 博・恵子 氏 （鹿沼市・園芸）

### 1 受賞のポイント

出荷市場においてNO.1のだいこん生産者を目指し、出荷量の拡大と鮮度追求による品質向上に努めてきた。季節雇用から常時雇用への切り替えやフォークリフトを利用したパレット出荷など、作業効率を重視した合理的な生産管理を実践し、高い所得を確保し優れた経営を行っている。また、地域からの委託農地を積極的に活用し、遊休農地化防止に貢献している。



### 2 経営の特色

#### (1) 経営の発展経過と現況

平成元年の就農時はハウスゆりと、干しだいこんを含む 6 つの露地品目を栽培していたが、平成 8 年に品目を絞って生食向けだいこんの栽培を開始した。地域からの耕作委託の要請を受け規模拡大を進め、現在は 33 戸からの借地により、だいこん 5.3ha(春だいこん 2.8ha、秋だいこん 2.5ha)、干しだいこん 1ha、ごぼう 1.6ha、水稻 2.8ha、陸稲 3.5ha の栽培を行っている。

#### (2) 生産技術について

秋だいこんは寒冷紗のトンネルで日射を弱め、地域慣行より 2 週間程度早めに出荷している。また、土壌病害虫の被害を防止するため土壌消毒は毎作実施し、だいこんの枝根化を防ぐため土壌分析結果に基づく施肥を行うなど製品率の向上に努め、露地だいこんにしては高単収(6.2t/10a)を維持している。収穫後は 6 台の軽トラックを利用し、土が乾かないうちに効率的に調整場へ運搬し、即日洗浄から調整、箱詰め、出荷を行うことにより鮮度を保持している。

また、夏だいこんの播種・間引き作業省力化のためシーダーテープを利用するほか、出荷については、敷地内の道路の拡幅を行うとともに夫婦でフォークリフトの免許を取得し、50 箱の出荷箱を積んだパレットをフォークリフトで4トントラックに荷上げ・荷下ろしを行う方式にし、作業の省力化・軽労化を図っている。

#### (3) 労働と生活について

季節雇用の中から 4 名を選抜し、生産・管理技術を習得させ、常時雇用として野菜の播種・間引き・洗浄等の作業を任せることにより作業効率を高めている。

また、雇用者への作業衣・マスク等の支給、更衣室等の整備、ほ場への仮設トイレの設置、導線に配慮した作業場の配置など、労働環境の整備に努めている。

家族の役割分担は、経営主は野菜栽培管理、パートナーは家事、パート管理、経理等、両親は水稻・陸稲担当としているが、だいこん収穫期の春と秋の 1 ヶ月間は家族労働力をフルに活用し、作業を分担して行っている。作業終了は午後 5 時までとし、作業中の休憩も必ずとり、メリハリのきいた作業でゆとりある生活を心がけている。

#### (4) 販売の工夫について

宇都宮市内の市場に出荷し、販売価格は市場関係者と直接交渉して決定している。有利な条件で取引できるよう、出荷量の市場占有率を高めながら、鮮度を重視し品質の向上に努めてきた。また、だいこんの選別は、経営主及びパートナーが担当し、出荷後の品質評価を毎回市場担当者から直接聞き取るにより、クレームのない品質管理につなげている。

## ■ 長谷川 良光・多代 氏 （足利市・畜産）

### 1 受賞のポイント

畜産部門では、稲 WCS(ホールクroppサイレンジ)の給与等を取り入れながら、基本的な飼養管理の徹底により、枝肉重量と肉質のバランスの良い交雑種肥育を行っている。

また、アスパラガスを導入し、たい肥の利活用と常雇の年間労働配分の改善を図る一方、米の減農薬・無農薬栽培や、飼料稲の生産、稲わら収集、営農集団等の構成員として麦類の生産を行うなど、多角的経営を実践している。

異業種との連携や農業体験など多彩な消費者との交流を通して、農業理解促進や食育・地産地消の推進に積極的に取り組む、食と農をつなぐ架け橋としての活動も高く評価された。



### 2 経営の特色

#### (1) 経営の発展経過と現況

米麦の作付面積拡大とともに、経営の柱であった乳用種去勢牛肥育部門の拡大を進めてきたが、平成 13 年の BSE 問題発生を機に交雑種肥育に転換した。平成 19 年からはアスパラガスを導入し、現在、交雑種肥育 250 頭、水稲 8.5ha、麦 12ha、飼料稲 3ha、アスパラガス 30a の経営を行う。

#### (2) 生産技術について

ビタミン A コントロールや優良素牛の導入、基本的な飼養管理の徹底などにより、B3 以上率が 7 割と良好な出荷成績を確保している。8~9 ヶ月齢の牛に稲 WCS を給与し、胃袋づくりと自給飼料によるコスト低減に役立てている。また、調査牛群を設け定期的に血液検査や体測、肉質超音波診断を行い、肥育成績と照らしあわせて飼料給与体系を作成している。今年、集団で専用収穫機を導入し、飼料稲の生産拡大を予定している。

#### (3) 労働と生活について

労働の中心は経営主と2名の常時雇用であるが、家族経営協定を締結し役割分担を明確にしながら、パートナーは農繁期の労働、生産物の PR 及びフラワーデザイン事業を担っている。年間を通じた作業を確保するためアスパラガスを導入し、周年雇用体制を整えた。また、営農集団の仲間と連携して、たい肥交換により 25ha もの稲わら収集やいちごの定植作業等を共同で行っている。

現在、長男は農業経営の研修という考えのもと、他産業に従事しているところであり、農業に興味のある青年を常雇として採用し肥育牛部門責任者として育成している。

#### (4) 販売の工夫、消費者との交流について

「とちぎ霧降高原牛」の指定生産者として、遺伝子組み換えしていないトモロコシを使った飼料を給与し高付加価値販売を行うとともに、牛舎見学とあわせて牛肉トレーサビリティの個体識別検索体験等を行い、消費者の信頼確保に努めている。

農商工連携による大麦の菓子・健康食品等の開発・販売に協力し、契約栽培による安全な原料供給や交流イベント「麦秋ウォーク」の受け入れなどを通じ、大麦の高付加価値化、需要開拓、さらには地域振興につなげている。このほかにも、食育や農業理解に向けた様々なイベントを開催している。

自らの HP 上に経営理念や栽培方法等を公開しており、また、減農薬・無農薬栽培米は子供の名前を商品名にし、HP やロコミなどにより直接販売を行っている。

## ■ 益子 光一・啓子 氏（那須塩原市・複合）

### 1 受賞のポイント

後継者とともに農地と労働力を有効活用した、「水稻＋キャベツ＋いちご」のバランスのよい複合経営により、高所得を上げている。

また、キャベツ部会を立ち上げ、地域に適した品種の選定や作型の確立に尽力し、県下の産地を築きあげるとともに、販売面においても、生協及び学校給食等への販路拡大・小学校における生産者の給食訪問などの取り組みを通じ、地産地消及び食育の推進を図っている。

県下の新たなキャベツ産地を築いた功績、地産地消及び食育の推進を通じ地域活性化や農業振興に大きく貢献している点などが高く評価された。



### 2 経営の特色

#### (1) 経営の発展経過と現況

水稻中心の経営から、生協とのブロッコリー等の契約栽培開始をきっかけに、平成5年に夏採りキャベツの栽培を依頼され取り組んだが、県内には前例がなく、試行錯誤の末、農業試験場黒磯分場に品種選定試験の協力を得るなどしながら、1年2作で、6月から半年以上出荷可能な、地域の風土を生かした栽培体系を確立し、新たに産地を築いた。

平成15年に後継者が就農し、いちご部門を担当するようになり、現在の経営面積は、キャベツ2.5ha、いちご20a、水稻9.6haとなっている。

#### (2) 生産技術について

安全・安心にこだわりを持ち、キャベツ部会として使用農薬を制限し、残留農薬の自主検査を実施するなど、安全・安心な農産物の提供を心がけている。

また、積極的に環境保全型農業に取り組んでおり、例えば、水田に生息するカエルがキャベツの害虫を捕食することから、地域住民との話し合いによりキャベツの周囲に水稻の作付を行うなど、地域ぐるみで農薬の削減に取り組み自然と共生した農業を展開している。さらに土づくり、水稻との輪作や緑肥すき込みなどにより、エコファーマー認定も受けている。

#### (3) 労働と生活について

いちご部門を後継者に一任し、三者による家族経営協定締結により役割・責任分担を明確化している。また、ゆとりある作業計画と定期的な休日取得により、夫婦で海外旅行に行くなど心身のリフレッシュを図り、ゆとりある生活を送っている。

#### (4) 販売の工夫について

契約栽培による経営の安定を図り、キャベツは生協に7割、学校給食等に3割出荷し、地産地消につなげている。地元の学校給食においては規格外の大きいキャベツが機械カットで扱いやすいということで喜ばれており、用途に応じた商品を提供するとともに、生協での定額・全量出荷を含めて、出荷ロスを最小限に抑える販売を実践している。

#### (5) 地域農業への貢献

市内小学校での給食訪問やほ場見学の受け入れを通じ、未来を担う子供たちの食育活動に積極的に協力し、「食」や「農」の大切さを伝えている。「キャベツのおじさん」として親しまれ、子供達の育成や地域農業の活性化に貢献している。